

第9章 日本海重油流出事故の影響

平成9年1月2日、島根県隠岐島沖において、C重油約19,000kℓを積載したロシア船籍タンカー「ナホトカ号」が、大シケの状況下、船体を分断し沈没した。

折れた船首部は、対馬海流や折からの季節風の影響を受け、1月7日、本県三国町安島の約200m沖に着底するとともに、流出した高粘度のC重油が、1月21日までに沿岸12市町村すべてに漂着し、イワノリの壊滅や漁業操業の支障など甚大な漁業被害を与えた。

県では、水質、自然、水産等への影響が懸念されたため、庁内に「環境保全技術対策プロジェクトチーム」を発足させ、関係省庁と調整を図りながら、総合的に環境影響調査を実施した。

1 水質の現況

沿岸30地点において、平成9年2月から平成10年2月までに11回調査した。

その結果、油分は、事故後の平成9年2月に11地点で検出されたが、3月以降の調査では、ほとんど検出されなくなった。

また、油処理剤については、全調査地点とも検出されなかった。

2 海生生物の現況

(1) 潮間帯

下記に示す海域と月に、平均水面から+0.5mの50×50cm枠内生物の目視観察を行った。

		(調査定点数)											
海域(調査機関) / 月	平成9年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
三国 (水産試験場)			10			5			5				5
三国以外 (水産試験場)			11★			5			5				5
〃 (委託)				11					11		11		

三国以外の海域における水試と委託の調査点は同じ。★：1～3月にかけて調査

ア 動物

長期間にわたって油魂に覆われた場所では、カサガイ類、小型巻貝類、ヒザラガイ類の付着力の低下、生息数の減少および死殻が観察された。したがって、重油は潮間帯に生息する動物の一部を死亡させたと考えられる。

しかし、5月以降には、これらの種の生息個体数が増加し、回復が明らかに認められた。

イ 海藻

イワノリや石灰藻に代表される海藻は、2～3月に枯死が目立った。これは、春の枯死の時期と重なった可能性も考えられる。

しかし、5月以降には正常な状況になっている。イワノリは、12月からつみ取りが行われているが、暖冬の影響からか、量は例年よりも少な目であった。

(2) 潮下帯

下記に示す海域と月に、水深0.5、2、6、10mにおいて、動物は2×2m、海藻は50×50cm枠内生物の採取（三国）または目視観察（三国以外）を行った。

(調査定線数)

海域（調査機関）／月	平成9年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
三国（水産試験場）				5★		5			5				
三国以外（委託）				11					11		11		

★：2～3月にかけて調査

ア 動物

三国の沿岸では、2～3月にバフンウニや小型貝類の死殻が散見されたものの、有用動物の生息密度に従来と大きく異なる結果は得られていない。2～3月に比較して、5月のクボガイ類とヒザラガイの採集数が多かったものの、油からの回復を意味するのか、季節的な変動かは明らかではない。

イ 海藻

一般的な海藻の繁茂は5月頃であるが、三国の5月の調査結果を過去のそれと比較すると、湿重量では増加、種類数では減少の傾向がみられた。これは、ホンダワラ類の種組成に起因すると考えられ、生育に異常は認められなかった。三国以外でも、8月以降ホンダワラ類が正常に生長しており、重油による影響はほとんどないと思われた。

ウ 漁獲状況

ワカメは5月2日から、サザエは6月1日から、バフンウニは7月21日から漁獲が開始されたが、質、量ともに油の影響とみられる報告はない。

エ バフンウニの沈着量

8～9月にかけて、三国の水深0.5-6mにおいて、平成9年生まれの稚ウニの採集を行い、過去（昭和55～62年、福井県、40事例）の値と比較した。過去の平均採集量は1,067個体/m²（0～5,267個体/m²）であるのに対し129個体/m²、採集最大密度は過去が5,267個体/m²であるのに対し800個体/m²であった。したがって、平成9年の沈着量は例年の12～15%と考えられる。